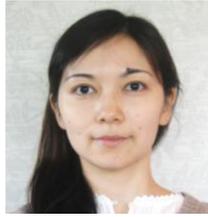


## 私の原点—古事記という「日本」



アンダソヴァ・マラル

私はカザフスタンで生まれ育ちました。子供の頃から読書が趣味で、いろんな国の文学作品を読むのが好きでした。日本の古典文学の名著である清少納言の『枕の草紙』を読み、日本という国に興味を持つようになりました。

大学は日本語学科に入り、3年生の時に一年間名古屋大学に留学することになりました。その時古事記<sup>1</sup>を読む機会があり、その出会いは私の人生を大きく変えたのです。それまでに味わったことのない感動と衝撃を覚えました。それをきっかけに、日本の大学院に進学すること決心し、研究の道に入りました。

古事記の世界に魅かれて、10年が経ちます。読み始めた当初、何がもっとも魅力的だったのか、ここにおいて述べてみようと思います。

まずは、古事記は712年に作成された日本のもっとも古い書物だということです。古い言葉で書いてあって、それを1000年以上も離れた時代を生きる自分が読めるということが魅力的でした。読むことを通して、古い時代を生きていた人々の心に触れることができる、それだけで大変貴重な体験をしていると感じていました。

もう一つは古事記の神話世界の面白さでした。カザフスタンはイスラム教とロシア正教という一神教の宗教がメインです。神は絶対的な存在であり、かつ絶対的な善であるのです。宗教の世界観はこのように一元化されてしまうのです。

それに対して、古事記の神話世界は両義的で、さまざまな視点からの解釈が可能です。どの視点から見るとよって、神話の世界が変わってくるのです。

イザナミは国土や自然の神々を産む存在から、人を殺して「黄泉国」へ連れて行く死の神へと変わります。スサノヲは「高天原」において乱暴をしていると思えば、出雲に降ってから、怪物のオロチを退治し、英雄として活躍のです。

一元化することのできない、多様で多面的な神話の世界を知れば知るほど、面白さが増していくばかりでした。自分が持っていた世界観はとても狭く、息苦しく感じました。神話の世界を知ることによって、解放され、今までになかった豊か何かを手に入れたような気分でした。こうして研究に没頭する楽しい毎日を過ごしていました。

---

<sup>1</sup> 古事記という書名は頻繁に使用するため、『』は付けません。

ですが、一つだけ驚いたことがあります。同じ世代の日本人に自分は古事記の研究をしていることを言うと、みなさんがとても不思議そうな顔をします。「古事記のどの部分が好きなのか」、あるいは、「どの神が好きなのか」と聞いて見ると、誰もが古事記を読んだことがないということです。読んだこともなければ、興味もさほどないという人が多いです。

それを聞いた自分は驚きました。ですが、驚きだけでは前に進めません。それはなぜかと考える必要があります。

まずは、もちろん自分の文化であるがゆえに、興味がないというのものもあるかもしれません。私も神話に興味を持ち始めたのは、ギリシャ神話を読んだ時のことです。母国の物語なんかに興味がなく、ギリシャやローマ、世界のいろんな神話を知りたいと思う気持ちが強かったことを覚えています。

ですが、それ以外にも理由があると思います。それは古事記が戦前の教育に悪用されたことなのではないでしょうか。国のイデオロギーを作っていく時に、古事記と日本書紀がそのベースとして使われていました。戦後になると、戦前の帝国主義にかかわる書物として古事記が認識され、教育現場からほとんどその姿が消されました。

それで、今の若い人は、『竹取物語』や平安時代の文学作品を教育の一環として読んでいることがあったとしても、古事記のことを勉強することはない。ただ歴史事実として名前だけが覚え、その内容にほとんど触れることなく、古事記は受験用単語としてしか認識されないのです。

それがいいかどうかということの問題にする必要がありません。そもそも歴史を考える時に、いいか、悪いか、という評価の仕方を避けたいのです。歴史とは客観的な事実であり、それから何を学べるか、そして、どのように未来へとつなげていけるか、ということを考えるのが大事だと思います。

古事記も同じです。古事記が歩んできた歴史の中で不幸な時代がありました。それを乗り越えた現在、古事記は何を語りかけているのか、どのような書物なのか、古事記の新たな発見に挑む必要があると確信しています。

では、研究の世界においてはどのようなのでしょうか。1960年代に発表された西郷信綱の『古事記の世界』という本の中で、古事記に出てくる物語は、世界のどこにでもあるような普遍的な「神話」として位置づけられ、天皇制も普遍的な「王権」として位置づけられました<sup>2</sup>。このように古事記はイデオロギーから解放され、それ以降様々な研究視点からアプローチがなされてきました。

世界神話と比較することを主題とする神話学の視点や、沖縄の儀礼と関連させて古事記・『日本書紀』の歌謡を考える「発生論」という視点を紹介できます<sup>3</sup>。また、古事記と『日本書紀』の物語に着目し、その違いを明らかにした上で、それぞれの作品の固有性を考えるという「作

---

<sup>2</sup> 西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 1967

<sup>3</sup> 藤井貞和『古日本文学発生論』思潮社 1992

品論」の視点も重要な研究の流れを汲んでいるといえます<sup>4</sup>。また、古事記の「語り」の部分を強調し、あたかも語り部の人が物語るかのように古事記を口語訳した研究者の試みが注目に値することでしょう<sup>5</sup>。

今年は古事記が編纂されて1300年になることも見過ごせません。日本各地の美術館において、それを記念とした展示会が開かれています。それを通して、古事記に触れてみることは大切なことです。

私自身にとって古事記との出会いは大きい意味があります。神話の世界のおもしろさ、それに導かれ、研究という道に入ったのですが、それは楽しいことばかりじゃありませんでした。「神話とは何か」という単純な疑問が、「自分とは何か」という根本的な疑問へと変わっていきましました。それに対する答えを見つけられない限り、研究も続けられない、そういう状況が何年かにもわたって続いていました。

自分とは何か、自分は何のために研究をしているのか、これからもずっと研究者として自らのアイデンティティを保っていきたいのか、というような自問自答の前に立たされていたのです。

不思議なことに、その疑問に対する答えを導いてくれたのが古事記でした。

自分とは何かを考える時は、まず、自分の出自が問題になると思います。

カザフスタンは長年にわたってソ連の一部でした。社会主義のイデオロギーの大きな柱は唯物論であり、神や神話、宗教といったような分野を否定します。現在は社会主義が崩壊し、カザフスタンはソ連以前の信仰や、イスラム教、ロシア正教といった宗教の復興に力を入れています。ですが、親の時代は神話を研究すること自体は考えられなかったのです。このような歴史的な背景が、自分は母国の神話を知らない、興味を持たないことの一つの理由だと考えています。

そして、もう一つですが、カザフスタンは古い時代に書かれた書物がなく、口承で伝わってきたものが主をなしています。それは叙事詩、歌、伝承などです。それが文字化されたのが18世紀ぐらいで、古事記に比べてかなり新しい時代のものです。祖国にいた時は、こうした口承文芸は古いものではないので、価値がないと考えていました。

ですが、古事記の研究を続けていると、以外なことに気が付きました。古事記には歌謡がたくさんあります。歌謡を通して古事記の中に、以前あったであろうという口承の世界を見出そうとする研究視点に出会いました。口承が持つことの意義を再定義する研究です。口承とは「語り」であり、「語り」は神と通じ合う儀礼のようなものだというのです。神との交流の中で見られる、歌謡や叙事詩、それこそが「真の神話」の姿という研究です<sup>6</sup>。

それは一つの研究視点であり、古事記の研究史を把握する上で重要な見解です。ですが、それと同時に、この研究視点を通して、自分の国の口承文化を再認識することができました。自

---

<sup>4</sup> 神野志隆光神野志隆光『古事記と日本書紀』講談社現代新書 1999

<sup>5</sup> 三浦佑之『口語訳 古事記(完全版)』文春秋 2005(初版2002)

<sup>6</sup> 藤井貞和『古日本文学発生論』思潮社 1992

分の祖国の神話に一つの価値を与えて、位置づけることは、研究者としてのアイデンティティを考えることにもなったのです。このように自分の国の「神話」もおもしろいと古事記が教えてくれたのです。

そして、「自分とは何か」を考えた時のもう一つの重要なところは、自分は何をやっていて、それはどのような意義があるのかということです。それは研究とは何かという大きな問題へと発展します。

様々な解釈がある中で、自分の研究は前とどう違い、何が新しいのか、他と比べてどこが面白いのか、自分のオリジナリティが問われてきます。神話世界の解釈をし、自分の理解を表現していくことは、一つ「創造」だと感じたのです。「造っていく」その感覚は絵を描く人、詩を詠む人、小説を書く人、どちらにも通じるのです。自分だけの感性によって今までになかった何かを生み出すこと。それは研究でも一緒なのです。

さらに、この「創造」とは、いつでも、どこでも見ることができます。デザイナーは今まで誰も着たことのない服を造ることによって、はじめて評価を得ます。画家も自分独自の色彩で絵の世界を造ることが求められます。料理人は自分だけの味を生み出すことができないと、お客さんが来ません。科学者が斬新なアイデアを実現させ、それが発明へと発展します。私たちの生きている世界は「創造」によって形造られているのです。

さらに、日常の生活も、友達と過ごす時間、仕事をする時間、一人でぼうっとする時間、犬と散歩する時間。少しだけ考え方を変えてみれば、その時間は二度とない大切な空間へと変わっていきます。それを「造る」のは自分なのです。

こういうことを知った自分は、かけがえのない宝物を手に入れたかのような気分になりました。これからは恐れること、迷うこと、何一つもない。自分の感性を生かして、いろんなことに挑めばいいんだと、今まで感じたことのなかった自由と自信に満たされました。

自信とは「自分を信じる」、この二つの言葉からできています。自分を信じるようになることは、簡単なことのように見えるかもしれませんが、その裏には、様々な苦労や芯が崩れるような迷いが隠されているように思うのです。苦労を乗り越え、新たな自分を「造る」ことができたのは、古事記の世界と素直に向き合っていたからだと考えています。そして、自分が変わると、周りの世界も不思議と新しく、おもしろく、そして、今までに感じたことがない世界へと変わっていったのです。

私が言いたいのは、神話はイデオロギーではないということです。神話と向きあうことによって、新しい自分に気づいたり、新しい世界を発見したり、辛い時に励まされたり、悲しい時に癒されたりするのです。

今年1300年を迎えた古事記は新たな時代へと一步を踏み出そうとしているように感じます。その時代とは、年配の方から子共まで、日本人も、外国の人も含めて、みんなが楽しく古事記を読む時代です。私はたくさんの人に古事記を読んでほしいのです。読んでいくことによって、どのような自分を発見するのか、どのような世界を覗き見ることができるのか、人それぞれだと思いますが、楽しめることには間違いありません。

古事記は私の原点です。そして古事記は、不思議な縁で結ばれ、自分が大切に守り、表現してきた「日本」でもあるのです。これからもずっとこの縁を大切にしていきたいと思っています。